

生存科学研究ニュース

Vol. 31, No.1 2016.4 発行
発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1
tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp
<http://seizon.umin.jp>

2016年度事業計画

2016年度事業計画は、2016年3月7日第2回理事会の承認を経て、以下の通り決定いたしました。

自主研究

1. 医療政策研究会
研究責任者 神谷 恵子
神谷法律事務所 弁護士
2. 資本主義の教養学一人間の生存と資本主義経済との関わりについての包括的研究
研究責任者 堀内 勉
森ビル取締役専務執行役員 (CFO)
3. 生存科学と教育研究会
研究責任者 小泉 英明
日立製作所役員待遇フェロー 他
4. 健康価値創造研究会
研究責任者 森本 兼曩
(一財)産業医学研究財団・常務理事
5. ライフイノベーションの展開に伴う倫理的・法的・社会的検討
研究責任者 河原 直人
九州大学ARO次世代医療センター 特任講師
6. 対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造
研究責任者 吉田 浩子
人間総合科学大学 教授
7. 沖縄と日本の比較の視点から社会とwell-beingを考える研究会
研究責任者 等々力英美
琉球大学大学院医学研究科 准教授
8. 少子高齢化時代の都市型災害対策;Health・Coexistence・Well-beingを意識した社会基盤システムの検討
研究責任者 坪内 暁子
順天堂大学大学院医学研究科研究基盤センター分室、助教
9. 老人観の転換による持続可能社会の展望
～比較的元気な老人による同世代・多世代への積極的関与～
研究責任者 森下 直貴
浜松医科大学 教授

10. 健康の社会的決定要因としてのソーシャルキャピタル研究会
研究責任者 稲葉 陽二
日本大学法学部政治経済学科・教授
11. 子ども期の貧困や逆境体験と認知症及び要介護リスクに関するライフコース研究：予防政策の提言へ向けて
研究責任者 藤原 武男
国立成育医療研究センター研究所社会医学研究部部长

助成研究

1. 心臓および心臓病に関する研究
(1) 疾患変異2型リアノジン受容体の不整脈発生機構の解明
研究責任者 村山 尚
順天堂大学医学部薬理学講座
- (2) 心室筋細胞内マグネシウム濃度調節の分子機構
研究責任者 田代 倫子
東京医科大学細胞生理学分野 講師
- (3) 心肥大時における死細胞貪食の役割解明
研究責任者 仲矢 道雄
九州大学大学院薬学研究院 薬効安全性学分野 教授
2. 認知症医療・介護における心理社会的研究
(1) アウトリーチ型認知症困難事例対応事業の対象となる高齢者に関する調査
研究責任者 井藤 佳恵
都立松沢病院 精神科
- (2) 認知症本人による認知機能障害・生活機能障害・行動心理症状についての自覚的体験内容と受診ニーズの特徴
研究責任者 扇澤 史子
東京都健康長寿医療センター精神科 臨床心理士
- (3) 若年認知症の人の診断直後の非薬物療法の受け皿
研究責任者 藤本 直規
医療法人 藤本クリニック 理事長
- (4) 包括的高齢者ケア技術の分析および教育方法とその効果に関する研究
研究責任者 本田美和子
国立病院機構東京医療センター総合内科医長

- (5) 認知症・介護の心理・社会的研究 認知症ケアの限界を超える研究
研究責任者 上野 秀樹
千葉大学医学部附属病院 地域医療連携部 特任准教授
3. その他
- (1) 研究者倫理教育の研究、実践を通しグローバルな研究者倫理を啓発する
研究責任者 市川 家國
公正研究推進協会 副代表
- (2) 遺伝子治療関連分野の市民公開フォーラム
研究責任者 大橋 十也
東京慈恵会医科大学 総合医科学研究センター教授
- (3) 「津波防災シンポジウム2016」の開催
研究責任者 森の防潮堤協会
- (4) 生存科学叢書
研究責任者 藤原 成一
日本大学芸術学部 講師

第12回 高齢者、障害者の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究会

2015年11月27日(木)に東京家政学院大学において開催された研究会では、岩永俊博医師(健康なまちづくり支援ネットワーク)を講師に迎え「健康をどう捉え、何を支援するか」とのテーマで行った。同氏は、国立保健医療科学院部長、地域医療振興協会ヘルス・プロモーション研究センター常勤顧問などを歴任された「地域型保健活動」の第1人者である。

健康づくりの目的としての健康は、①「病気かどうか」という意味の健康と②「生き方としての健康」に分けて考える。「病気がよくなる方向」と「それぞれの健康状態で自分らしく生きようとする方向」の二つのベクトルが合成される方向が、「ヘルス・プロモーションや健康づくり」において「目指すべき健康な生き方」である。

自分の心身の状態を知り必要な行動をとることができるとともに、自分なりの健康な生き方を自分で考えることができることは、住民一人ひとりが自分なりの目指すべき健康な生き方を持ち、それを実現するための手段であり、「健康づくり」では、目指すべき健康な生き方のベクトルをいかに見つけるかが重要になる。地域の健康づくりにおいても同様で、地域の人たちが自分たちなりの目指すべき健康な生き方を持ち、実現するため、自分たちの地域の状態を知って必要な行動をとることができ、自分たちなりの健康な生き方を自分たちで考えることができることが求められる。

大事なことは、問題探しや原因探しではなく、「あるべき姿」探しである。現状の問題に直接的に対処する(「改修型」)のではなく、本来目指すところを実現するためにはどのような条件が必要かを考え、その条件をどう整えるのか設計図を考え(「設計図

型」)、それに基づき誰が何をすればよいかを、一緒に考えることが求められている。

保健指導や患者教育、健康教育を考えると、まず対象者の捉え方を転換する必要がある。本人や家族にとって健診での異常の指摘や病気の発症・診断などは、連続性の保たれていた日常の断裂が起きた状態(「連続性の断裂」)である。断裂後の新たな生活の再構築(「生活の再構築」)を余儀なくされている状況にあると捉える。

専門家の役割は「断裂のショックの軽減」と「生活の再構築の支援」である。再構築した生活の行き先はどこなのかが大切であり、その行き先は一般解ではなく特定解である。その特定解を解く鍵は、「それぞれの状態を持ってどう生きるか」にあり、本人や家族と共に特定解を見つける手助けをするのが専門家の役割ではないか。

健康教育の目的は、本人や家族が「自分は、あるいは家族も含めて、どのような生活を構築していくか」を考え、自分はどのような治療やケアを受けるべきか、どのように生活習慣を構築していくかという視点から、納得して選択する力、決定する力をつけること。それがインフォームド・コンセントであり、エンパワメントである。このとき、①本人や家族には生活者としての切実な「思いや期待」があり、②一方の医療従事者には専門家としての「知識や経験、思い」がある。互いの思いや知識がぶつかり合う。そこから、目的とする状況やその実現方法を関わりの中でどう醸成していくかが大切である。「病気がよくなる方向」と「それぞれの健康状態で自分らしく生きようとする方向」の双方により合成されたベクトルから「目指すべき健康な生き方」を考えることが求められる。

今回のテーマは「状況に応じた自分の生き方、死に方を自ら考える」という意味で、病気や障害、死などに直面した際に共通して重要とある。「将来は過去の延長線上にあるのではない」と突き抜けた人が回復のポイントになる。

(松田正己、江口晶子)

第1回 健康価値創造 研究会

今日の社会において健康の持つ意義は極めて大きい。

本研究会では、これら健康の持つ種々の意味とその価値につき、個別的な視点から論じ出発しながらも包括的な思考の体系にまで高めるべく議論を展開していこうとする。

経済価値社会における健康価値概念の重要性、近代日本における医療との関わり、宗教性と健康の理念、健康の持つ東洋性と西洋性、健康と労働、ライフスタイルと健康、遺伝と健康、健康と自然資源利活用、健康年齢と健康寿命、地域社会と健康の文化史などを主要な主題として、3年間にわたり15

回（ほぼ2カ月ごとに1回、年間5回）の研究会を継続して開催し縦横に討議を深めていく。

それぞれの研究会では研究会メンバーとメンバー以外の外来講師を招請してターゲットとする主要主題につき階層的でかつ包括的な討議を行い、独創的で社会的に意味深い健康価値概念と、それに基づく近未来社会におけるあるべき健康価値像を構築していこうとする。

第1回研究会を2015年5月16日（土）18時より順天堂大学医学部衛生学公衆衛生学会議室にて開催した。主題は“健康価値創造活動の目指すもの”とし、この研究会を運営していく主たる研究者達が自由な発想の元に健康価値についてそれぞれの立脚点から意見を述べてこれからの研究会活動の方向性を論じあった。

森本 兼曩（一財・産業医学研究財団常務理事）が健康をめぐる世界の動向をみすえながら、日本学術会議連携会員として衛生学会、公衆衛生学会などと共催した健康価値創造シンポジウムのこと、また日本医学会幹事としてJapan-CDC創設部会座長としての活動などを具体的に紹介して国の内外で“健康”が重要な社会的ISSUEとなっている事実を述べた。続いて、稲葉 裕（救世軍清瀬病院・医師）は“健康とはいったい何なのか、その本質的な重要性はどこにあるのか”と昨今の健康ブームに対して警鐘を鳴らし、より深い議論が求められている状況を指摘した。

香山 不二雄（自治医科大学・医学部教授）は元気でイキイキと働くことの人間としての普遍的な重要性を踏まえて期待される産業医の活動の在り方を探っていきたいとの想いを真摯に述べた。

和田 裕雄（順天堂大学・医学部准教）は臨床医学の場から健康予防医学分野に移籍してきた自身の経験から期待されるこれからの活躍の抱負を述べた。

福田 洋（順天堂大学・医学部准教授）は大学医学部病院で人間ドックを中心とした健康診断による健康予知予測予防医学業務に携わる日常から見えてくる“健康“のとらえ方を表現して、そこに独自のひらめきを感じさせた。

金子 哲也（杏林大学・保健学部教授）は保健学分野で教育と研究に携わってきた長年の経験から健康そのものを対象にする専門職の在り方に大きな期待をこめて発言をした。

このような議論を経て、この研究会活動の成果を単行本として出版すること、現在改定作業が行われている中学・高校の保健（＝健康予防医学）の教科書にとりこんでいくこと、また関連する学会の年次学術集会で健康価値創造シンポジウムを開催してその成果を広く敷衍していくことなどもこれからの具体的な実行課題とされた。

（森本 兼曩）

「児童虐待に対するソーシャルワークの国際比較研究」
アメリカ調査（2016年3月19日～3月27日）

今回の調査の主たる目的は、公益財団法人生存科学研究所の研究助成を受けて、米国における児童保護、施設あるいは里親後のアフターケアと児童虐待に対するソーシャルワークに関する研究

「Development of Therapeutic Children Care and Longer-term Systems that Manage Transitions into Adulthood and Independent Living」を行うことを目的とするものであった。そこで今回は米国ミシガン州にあるグランドバレー州立大学 Joan Borst 教授のコーディネートの下、ミシガン州での各機関の取り組み等についてインタビュー調査等を実施した。

19日午前成田より出発、時差の関係で現地19日午前にシカゴ到着、同日午後にミシガン州グランドラピッツに到着した。20日にJoan Borst教授とのミーティング、21日に里親支援サービスを展開するBethany Christian Services (Holland)を訪問、里親支援のスーパーバイザーでもあるChristopher Hulett氏と現場のソーシャルワーカー2名にインタビュー調査を実施した。同時に、本研究についてのプレゼンテーションも実施した。ここでの調査では、里親に委託された子どもためのオンブズマンなど第三者的存在による子どもの権利の保護や、パーマネンシープラン、子どもの意見を聞くための仕組みについて聞き取りを行った。

22日は、グランドバレー州立大学で児童保護に関するソーシャルワークの専門家であるGeorge Grant教授との意見交換、そして、児童施設(ST. JOHN'S)のプログラムディレクターであるRenee M. Orr氏とセラピストの2名にインタビュー調査を実施、施設内の視察等を行った(写真①)。虐待を受けた子どものトラウマに対する取り組み、その治療を受けることのできる子どもの権利、また、14歳から主に始まるリービングケアについての説明を受けた。パーマネンシーに関する点では、訪問先の施設でもケアワーカーの離職率は高いが、その理由はキャリアアップ等の理由が多く、日本のようにバーンアウト等の理由が少ないことなども明らかとなった。さらに、アフターケアについては大きな課題と認識しており、財政的にも制度的にも不十分であることなど、今後の課題についての聞き取りも実施することができた。

写真①②：児童施設 (ST. JOHN'S)



23日はGrant教授のコーディネートにより、現地の裁判所で実施される子どものパーマネンシープラン検討会の傍聴、非行少年に対する支援計画検討会への傍聴を許可していただき、参与観察を実施した。また、裁判所のケースワーカーにもインタビューを実施した。子どもを支援するための決定プロセスが日本とは大きく異なっており、子ども本人、家族などがより主体的に参加しながら決定していくプロセスこそ、今後の日本の大きな課題であることが改めて伺えた。

その後、Bethany (Grand Rapids)を訪問し、プログラムマネージャーでもあるLukas Ziolkowski氏を始め、ソーシャルワーカー、セラピスト、スーパーバイザーなど計6名に対しグループインタビューを実施した。ここは主に難民などの子どもの支援を実施しており、そういった社会的に疎外されてきた子どもたちや親に対する文化的なプログラムの意義などについて説明を受けた。

24日は、コーディネーターのJoan Borst教授とシカゴに移動し、交通機関の乱れにより、予定していた訪問は叶わなかったが、これまでのインタビューの振り返りなどのミーティングを実施した。25日は児童保護やセツルメントハウスとして世界最大の規模を誇ったハル・ハウスを訪問し、初めての女性ノーベル平和賞受賞者でもあるJane Adamsなどのコミュニティリサーチの取り組みについて、視察研修を実施した。当時のハル・ハウスでは、移民の国ごとの把握や世帯の所得の把握を地域で進めた上で、必要となる教育プログラムなどを計画し

写真③：ハル・ハウス



ており、子どものための地域づくりを考えていく上で、非常に示唆に富むものであった。その後、これまでのインタビュー、ならびに今後の研究についての内容などのまとめのミーティングを実施した。

26日午前日本(成田)に向けシカゴを出発、日本時間27日午後に到着、同日夜に岡山に到着した。
(直島克樹)

事務局便り

*日本学術会議協力学術研究団体へ承認されました。
*学術誌「生存科学」バックナンバー閲覧について
ウェブサイト「メディカルオンライン」にてバックナンバーを掲載しております。会員のかたへ、閲覧が無料になるパスワードを送付させていただきます。

研究会日報

- | | |
|----------|--|
| 2月12日(金) | 高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究会 |
| 2月19日(金) | 社会歴史文化的要因を背景とするソーシャル・キャピタルとwell-beingに関する研究会 |
| 2月26日(金) | 健康価値創造研究会 |
| 2月27日(土) | 高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究会 |
| 3月11日(金) | 高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究会 |
| 3月12日(土) | 社会歴史文化的要因を背景とするソーシャル・キャピタルとwell-beingに関する研究会 |